

# 緒方惟精先生の思い出

林田明

緒方先生に初めてお目にかかったのは、昭和三十四年の四月某日であった。九州の大村（長崎県）から千葉県の習志野へ、勤務先の高校を転任して間もなくのことであったと思う。已に県立国府台高校の先生をしていた大学同期の友人S君の案内であった。初対面の時の詳しい話はもう忘却の彼方であるが、唯一つ、「林田さん、勉強しなさいよ。」と励まされたこと、それに

あの時出されたにぎり寿司のおいしかったこと、この二つがすぐ脳裡に浮ぶ。まだ京都弁の匂いが残る奥さまのやさしい笑顔が先生の面影と二重になって思い出される。あれからしばしば旭町のお宅に伺ったり、今は亡き齋藤清衛先生と他の先輩友人と一しよに緒方先生とは研究会や小旅行（銚子行）をした思い出が走馬灯のように甦ってくる。

緒方先生は昭和十年に広島文理科大学文学科を卒業された。私は十七年後の後輩であるが、先生は国文学わけても上代文学の御専攻であられた。しかし中古文学、特に源氏物語などは造詣が深く、色々と教えを伺ったがさらに漢文学の方も、上代のみならず、近世における御研究も多数あり、広い学殖肌の方であった。私は逆に国語学専攻で、先生とは学問そのものの分野は必ずしも一致しなかったが、広い意味での国文学では私も興味があり、共通の広場もあった。逆に上代特殊仮名遣に関して先生から御質問をいただいで、甲・乙二類の区別など汗だくでお答えした思い出もある。

千葉大学もまだ文学部といていた頃、場所は千葉の稲毛にあった。軍隊の馬小屋があった跡地に、木造バラックの校舍が長家のように並んでいた。そこで、今は亡き大岩正伸先生にも、緒方先生から紹介された。

昭和三十五年四月、千葉大学に留学生課程を置くことになって、主として東南アジアの留学生が毎年多数留学して来た。この留学生課程は千葉大学教養課程を分担していた文学部に併設されていた。翌三十六年四月、私は留学生部の講師として採用され、日本語教育の担当を命ぜられた。昭和三十七年四月、

西千葉キャンパスに移るまで、留学生課程は文理学部の元、稲毛キャンパスにあった。緒方先生とも行を共にしたこと、よく稲毛駅前の鮎屋に行ったことが思い出される。やがて留学生課程は留学生部となつて、文理学部を離れ、最初の西千葉地区の独立機関として移転してきた。数年後、この西千葉地区に文理学部も移転してきた。五階建の今の教養部のビルも文理学部としてこの時に建築された。昭和四十三年四月、文理学部が、人文学部、理学部、教養部の三学部に発展解消した。荻原先生、大岩先生が人文学部へ、緒方先生は大野先生とともに千葉大学学生の全体を担当する教養部へ、鶴沢先生は教育学部教授として御栄転なされた。それに新任の栃木先生、国語学の助教は私であつた。組織はそれぞれ別になつたのであるが、学部学生は二年後になるので、校舎が出来るまでの二年間、今の教養部三階に私の研究室も与えられ、緒方先生とご一緒に勤務することができた。左端に大岩先生、私、隣りに緒方先生がおられ、国文教室は廊下に出なくても、研究室同志が内部にドアがあつて、トントンとノックすれば、通行が自由に出来た。それでよく緒方先生の部屋にお邪魔した思ひ出がある。人文学部の校舎が落成して昭和四十五年に移転した。それと共に、緒方先生は大野先生と共に五階の左の奥にお移りになつた。現在島田先生がおられる部屋である。そして大野先生も御退官され、そのあとに今は竹内先生が入室しておられる。新校舎に移転してからは、あまり多く緒方先生を訪問しなくなつた。私も多忙になつたからである。その間、四十七年には敬愛する大岩先生が御他界になり、後任人事や、学務に忙殺された。ただよく覚えてい

ることは、緒方先生の退官記念最終講義を、人文学部の階段教室で行つたことである。先生を識る教養部・人文学部・教育学部の各同僚教官学生それに教え児の多数が参加して盛会であつた。講義内容は江戸中期の儒学と伊藤仁斎・東涯父子を中心とする、儒家の研究であつたように思う。先生の奥様は名門儒家大江家の子孫で、先生の末女、千春さんは大江家を継いでおられる。そういった因縁もあつて、先生は上代文学以外に近世の儒学や日本漢文に深い愛着と御研究があつたように思う。

先生は千葉大学八代目の図書館長として、昭和四十二年に就任され、今日の圖書の整備と充実を画されたのであつた。今日の中央図書館は先生の計画で建築された。中でも、外から二階の学生閲覧室へ通じる三十一段の石段は間口十メートルもあつて、他大学には見られない特長となつてゐるが、これも建築時に緒方先生が特に予算をもらつて作られたと聞いている。しかしこの図書館長時代、大学紛争に巻きこまれ、千葉大学評議員として、日夜苦勞を重ねられたことはあまり知られていない。最後はどうとう学長ともども、責任をとつて図書館長・大学評議員を辞職されておられるが、先生にとつて、大学の顔である

図書館の発展は、重要な仕事であつただけにおやめになる時は大へん残念のことであつたろうと思われる。しかし、後任の館長に、荻原教授が任命され、文理の国文出身が二代続いたことで、先生も満足されたことであらうと思われる。

千葉大学御退官後、私は外房の旭市の旭中央病院、付属看護学院に、文学の講師として先生を御推薦したことがあつた。若い女子学生に講義されることは、精神衛生上有意義であると思

ったからであった。先生は遠い所であったにもかかわらず、生真面目にお勤めなされたと同っているが、やがて、千葉経済短大の初等教育科の科長として大いに御活躍され、また国文学の講義や御研究に情熱を燃やして、幾多の子女をお育てになったと同っている。

先生の御出身は新潟県の新発田市だそうである。談論風発、やがて唄になればおくにの民謡、「佐渡おけさ」を唄われた。大学のコンパ、追コンや、同窓会の宴席であった。教え児の中には思いつく方も多いと思われる。

先生はやや瘦身の中肉中背の方であった。礼儀正しく真面目であった。何事も几帳面でお手紙を出すこと必ず御返事を下さった。筆不精の私など二回も三回もお葉書をいただいて赤面したことが何回もあった。時にはお手紙で、便箋に十枚ぐらいあったこともあった。私は二枚かせいぜい三枚ぐらいであるが、先生は最低四枚ぐらいであった。先生の筆まめには感心もし、私もお手本にしているが、何時までたっても、先生には及ばないと諦めている。

先生はやさしい方であった。怒られたことがない。ずいぶんお怒りになれる材料はいろんな意味で沢山あったと思うが、すべて、胸中に秘めて決して爆発はされなかった。私にはその苦衷の一部をお話になったことはあるが、未練や嫌味がなく、淡々としたものであった。あまりスポーツはなさらなかったが、千葉大では永年、弓道部の顧問であった。先生は弓を引くことがストレス解消の一つであったように思う。しかし段位などは伺ったことがない。

先生は健康には日ごろから注意しておられた。先生の持たれる古い靴には、たいがいの薬品が入っていたように思う。栄養剤、それに頭痛と腹痛には何種類かの薬品がいっぱい用意されていた。「私は薬屋から表彰を受けてもいいですね。」と笑っておられた。その健康留意第一の先生が、御病気になるられて、千葉駅近くの椿森の国立千葉病院に入院されたことがあった。軽い脳梗塞の一過性のものであった。特に後遺症はなかったが、先生は十二分に注意され、しっかりと療養をなさったようである。その甲斐あって、その後、この病気は根絶されたものと思っていた。

昭和五十七年の六月の尚志会には、先生はお元気で出席された。先生は日本酒が好きで、その時は多少多目に聞こし召されたらしかった。会が終わっても、先生はお休みになっていて、起すのが悪い感じであった。でも酒席で、途中からダウンなされた事は始めてであった。私は車でお送りする途中、「先生、お休みになったのは始めてですね。だいぶ、お弱くなられましたね。でも健康が第一ですから。」とか何とか言って、「おからだ、お大事になさってください。」と言って自宅の前で別れたことが思い出される。そして翌年の五十八年の同窓会には御出席になられなかった。私は支部長を引き受けた直後でもあるので、六月末のある日、長男の惟章氏に、「尚志会支部欠席の挨拶状に、病気にて失礼、とありますが、先生は如何ですか。」と尋ねたら、「実は、父が病にたおれて、大分恢復したが、現在はまだハビリのため、辰巳台の千葉労災病院に入院中。」との返事だった。一時はと驚きはしたものの、今はリハビリテーションのために入

院中と聞き、大事に至らずによかったなあ、と安堵した。そこで家内と一しよに労災病院にお見舞した。

先生の御尊顔を病室に拝見した時、随分お瘦せになっておられた。そして一番気になったことは、お言葉がスムーズでないことであつた。同じ同僚で已に退官されておられる同窓の〇名譽教授は、お見舞しても、お話ができないし、筆談も不可能でただお互い、笑つて微笑することが唯一の意志疏通であつたのと比べれば、お話ができるだけでも喜びであつた。先生は長い闘病生活に、お苦しみであつた。病院の規則も先生には苛酷であつたらうと思う。「嫌だ。嫌だ。」と言つておられる先生に、奥さま、長女の方、千春さんが色々となだめておられるのが印象的であつた。ここできつてもりハビリに専心し、治癒してから退院、社会復帰と御自分でも苦しいスケジュールを覚悟していらつしやつたようである。

病氣の原因は、かつて罹病された脳梗塞の影響で、半身が氣がついてみたら、麻痺していて、特に手や足のしびれがひどかつたそうである。しかし発見が早く、大学病院に入院されて恢復に向い、主治医のすすめもあつてりハビリテーションで有名な千葉労災病院に転院されたのであつた。

でもお話が不明瞭で、先生はずいぶん恢復されたのであろうが、私には大へんおひどい様子に受けとれていた。しかし、これから更に向上恢復なさるのであろうと思つて、くれぐれもお大事になさることを願つて辞し去らうとしたら、先生がしんみりなさつて、さらに嗚咽なさるので、私もびつくりした。やはり病氣すれば弱氣になつて、淋しいのであろうか。先生の泣き

顔を始めて見た。何だかすまないような、恨めしいようなそんな泣き顔であつた。奥さまが、やさしく慰められた。私もこれ以上先生に泣かれると耐えられないので、心を鬼にして、その場から去つた。否、逃げ出したといつた方が正しい。そしてそれが、今生で最後の先生との別れとなつた。もし最後だと分つておれば、——私は何回慟哭したことか。もう少し居てあげればよかつた、と何回後悔したことか。そしてそれから数日後の七月七日、七夕の日、朝十時過ぎに千春さんからの電話で、先生の急逝を知らされたのである。先生がどんなお気持ちでお亡くなりになったのか、残念で残念で、惜しみて余りある気持である。何でも朝食は済まされていたらしい。看護婦が氣づいた時にはもう絶命されていた。あの時お見舞いした時、先生はもう死を覚悟されて、嗚咽されたのかも知れない。死因は急性心筋梗塞と診断された。享年七十七歳であつた。かつて生存者叙勲で勲三等旭日中授章を授与されたが、更に従三位の位階が贈られた。「佛性院精学研心居士」と戒名された先生の一周忌が御遺族によつて今年の六月三十日に行われた。先生の平安を心から合掌して筆を擱きたい。

(一九八四・七・八)